

# 総合学習（文化領域）

小 西 裕 一 中 川 晶 子  
 邑 井 吉 治 宮 島 浩 典  
 石 川 誠 釣 本 直 行

## 1 領域の目標

全体論の総合学習でめざす子どもの姿「共に生きる社会や環境に自らはたらきかける姿」を受けて、文化領域として次の目標を設定した。

身近な文化のよさにふれることで 豊かな生き方をしようとする態度を育む

「文化」ということばが意味するところは、辞書にその意味を尋ねても「人間が学習によって社会から習得した生活の仕方の総称。衣食住を初め技術・学問・芸術・道徳・宗教など物心両面にわたる生活形成の様式と内容とを含む」（広辞苑 新村出編 岩波書店）とあるように、実に幅広く、人々の生活に深くかかわっているものである。しかし、日々の生活に有形無形の影響を与えているにもかかわらず、身近にあるが故に、その「文化」のよさに気づかずにいることが多いように思われる。

そこで、文化領域では、改めて意識して身近にある「文化」に十分ふれたり、浸ったりすることで、その「よさ」に気づいたり心の豊かさを感じたりすることができるのではないかと考えた。そして、その気づきや感得したことが、日々の生活の中で、余裕をもって物事を見たり、価値あるものに出会ったとき素直に感動したり、他の者の感じ方や考え方や行動を尊重したりすることのできる自分を見い出していくことにつながると考え、上記の目標を設定した。

## 2 活動を構成するにあたって

### (1) 単元設定について

前項でも述べたように、文化は身近に存在する。私たちが大切に考えている文化とは、決して特別なものではなく、日々の生活の中で毎日のように目にしたり、何気なく行っていることの中にある。その意味では、学習の対象は広く「ひと・もの・こと」から求めていくことができる。その身近な文化にかかわる「ひと・もの・こと」がもつよさへの気づき、また、その文化のよさを背景にした考え方や行動を尊重する態度を育むために、次のような視点をもとに、学習活動を構成していくことにした。

1つ目の視点は「身近な文化の尊重」である。

まず、身近にあるが故に、気づかずにいる文化の「よさ」に気づかせていきたいと考えている。また、その「文化」が生まれ、現在も受け継がれている背景や経緯に触れていくことも大切である。その背景や経緯にかかわる観点として、「気候風土、地域性、歴史、伝承、行事、季節感、人々の智慧や思い、願い、宗教」を挙げることにした。これらの観点は、文化を見たり、文化に触れたりしていくときの入口となるものである。これらの観点を考慮しながら文化に親しむ場を設定していくことが、真に文化の「よさ」に気づいたり、その文化を尊重しようとする態度づくりにつながっていくと考えている。ひいては、その文化を背景にもつ「ひと」を尊重していくことにもなっていくだろう。

2つ目の視点は「文化と文化のつながりの意識化」である。

ある文化を見たとき、その文化が決して単独で存在しているものでないことに気づくであろう。一つの文化が生活様式全般にかかわっていたり、その文化の広がりや、他の文化に影響を与えていたりしている。また、それぞれの文化の融合が、新たな文化を創造しているときもある。このように、一つの文化を扱うことで、文化と文化につながりがあるということをとらえていくことも大切なことである。

3つ目の視点は「文化へのはたらきかけ」である。

決して、特定の文化の伝承者や後継者を育てようというのではない。毎日の生活の中で、目

にしたり、行ったりしていることに文化的な背景を感じることが、余裕をもって物事を見たり価値あるものに出会ったとき素直に感動したりすることにつながっていく。意識して文化という文脈のうえに立った活動の場を構成することが大切であると考えている。

以上3つの視点にもとづき、各学年の単元を構成していくことにした。

なお、扱う題材として、「金沢」の伝統文化を中心に取り上げることにした。本校が位置する「金沢」は、伝統文化が今も息づく街と言われるが、それは決して特定の芸能や美術が守られていることだけを意味するのではない。季節によって色彩や味付けを変化させていく和菓子や、原材料や水に恵まれまた冬の寒さや降雪が育み、加賀百万石時代から保護、振興が図られてきた美術工芸や芸能などが、さり気なく毎日の生活の中にとけ込んでいることにある。

これらのことをもとにした学習を学年を追って進めるに従い、子どもに自ずと文化を尊重する態度の素地ができ、さまざまな文化を背景にもった人々がつくる共生に根ざした社会づくりに対する意識化が図られていくことを期待している。

## (2) 学びを深めるために

全体論の「単元を構想するにあたっての4つの視点」を受けて、文化領域では、それぞれを次のように考えて単元を構想するようにした。

### ① 一人一人のさまざまな背景をもつ「文化」へのはたらきかけを促す

特に子どもが文化に十分にふれたり浸ったりできることを大切に考えている。本物にふれ、本物の流儀に従って味わうことが、人間として文化のよさや心の豊かさを感じながら生きることや文化を尊重する心や態度の育成につながると考えるからである。視覚・聴覚・味覚など五感を働かせたり、物を創ったりして、本物にふれる活動、本物の雰囲気をも十分に味わう活動を取り入れていきたい。

また、そこでの活動の中で、追求活動の個性化に対処したアドバイスや支援が行えるようにT・Tによる指導體制を構成したり、専門的な知識が豊富なゲスト・ティーチャーを招いたりして、その専門家の目を通しての文化にふれさせていく場なども考えていく。

### ② 一人一人の「文化のもつよさ」にかかわる素朴な考えの表現を促す

①で述べた本物の文化にふれる活動を通して、子ども達は実感をもって文化をみることができるだろう。そして、自分なりのことばで文化を語るができるのではないだろうか。その表現を促すことによって、自分が何を不思議と感じているか、問題と考えているかなどを自覚できるのではないかと考えている。それこそが、真に一人一人の追求課題や追求方法など問題解決の個性化を図っていくことにつながると考えている。

### ③ 子どもが獲得した考えの共有化を図る

個々が学習を進めていくときに、一面的な追求に終始することなく、自分の認識を広げたり深めたりできるようにするために、子どもが意見交換できる相互交流の場を単元の途中で設定していく。また、発展的な問題追求を可能にし、今後の文化に対する主体的な働きかけができるように自分なりの成果を発表する機会も設けることにした。

なお、単元途中の相互交流の場面や成果の発表の場面では、場合に応じて教師は子ども一人一人の願いやつまずきに対する不安をしっかりと見てとり、個が全体の場に生きるような適切な支援を行えるように留意したい。

### ④ 子ども自身の変容の自覚を促す

これまで①、②、③で述べてきたことをふまえ、自分なりにとらえた文化の「よさ」やその文化と自分とのかかわりを記録し表現する場を大切にしたい。それらをポートフォリオのなかにはたきつけていくとともに、とじるものを選択させる場やとじたものを見直す場、さらに「文化を尊重するとはどういうことか」などを記述する自己評価の場を適宜に設けていきたいと考えている。

### 3 実践例 - 3年 -

(1) 単元名 わがしのひみつ見つけたよ

(2) 目標 伝統的に受け継がれている行事や季節と結びついた和菓子を探したり調べたりすることで和菓子や行事に込められた人々の思いや願い、季節を楽しむ人々の知恵に気づく。

(3) 単元設定について

西洋は空間や論理を大切に、東洋は時間や感性を大切にするという見方がある。日本では、季節や人生のひと時に心の目を向け、その時の心のあり様を大切にすることが、この国で受け継がれてきた様々な文化の中に共通して見られることではないだろうか。

本単元は和菓子を扱うが、和菓子について学ぶことではない。和菓子を通して、ものやことにある「文化」を感じ取る学習である。何気なく過ごしてきた地域や家庭の暮らしの中の、ものやことによって、人々が生きている今を楽しく豊かなものに行っていることに気づかせたいと考えた。

日本には受け継がれてきた様々な行事がある。正月、節分、端午の節句、彼岸などの年中行事

や、誕生、七五三、成人、結婚、長寿祝い、葬礼など、人生の節目の行事と言えるものもある。このような行事に我々は、喜びや悲しみ、願い、祈り、感謝などの思いをこめ、それらの思いを家族や親族、地域の人たちとともに分かち合ってきた。そして、これらの行事と結びついた和菓子が存在してきた。おはぎや柏餅、千歳飴などである。和菓子処と言われる金沢にも、同様なものは多数存在する。正月の福梅、雛祭りの金華糖、婚礼祝いの五色生菓子、安産祈願のころころ餅などである。

我々の先人は様々な行事の折に和菓子を求め、家族で食べたり親族や地域の人々に配ったりすることで、季節や人生の節々を楽しんだり思いの共有化を図ったりして、生活の中の楽しみや人と人とのつながりを深めてきたのである。

しかし、現在、核家族化や少子化、都市化や高速化などにより、家族や親族の数やつき合いが減り、地域社会の人々のつながりも希薄になった。自然も減少し、行事の形骸化が進み、季節や人生の

#### 単元計画 (総時数20時間)

主な活動と内容	学びを深めるために
1 和菓子屋さんに来ていただき 金沢の和菓子「氷室万頭」について 由来やそれにこめられた思いについて話をうかがい その後の感想を話し合う ・たくさんの人が毎年こんなことをしていたんだ ・そんないわれがあったのか 万頭のイメージがかわったよ ・これで今年の夏は元気でいられるよ ・和菓子には、食べる意味があるものがあるんだ	①②
2 我が家の和菓子調べを紹介し合い 関心に応じて追求する内容や方法を計画する ・いろいろな和菓子があるんだな いろんな時に和菓子を食べているんだな 和菓子屋さんにきていただき 質問に答えてもらう <和菓子からの興味・関心> 年中行事の和菓子 季節の和菓子 和菓子にこめられた願いや思い 和菓子の作り方 外国のお菓子 和菓子以外に行事や季節と結びついたもの など	①②
和菓子から思ったことを調べよう	
3 計画にしたがって調べる 家族や親戚の人から聞き取って 和菓子屋や観光物産館などを訪ねて 市役所を訪ねて 旅行先 帰省先で インターネットのホームページで 書籍で	①③
4 調べたことを新聞やポスターなどにまとめる ・どのようにまとめようかな 言葉だけでなく 絵や写真も コンピュータ等の機器を利用して	②③
5 交流会を開き これまでの活動を振り返る ・みんなのまとめたものを見よう ・わからないことを質問を聞く会で尋ねよう	①③④

節々を楽しんだり思いの共有化を図ったりするゆとりもなくなってきている。このような時代に、和菓子から、人々の思いがこめられ習慣として長い間受け継がれている日本文化の存在やよさに気づくということは、たいへん意義のあることではないだろうか。

単元設定をする上で考慮する一つ目の視点のこととして、本単元では行事、季節感、人々の思い願いなどが観点として考えられるであろう。これらの観点を入り口として子どもがものやことにかかわっていくことによって身近にある「文化」の存在、意味、価値に気づいていけるようにしたい。3年生なので歴史的な背景を正確に理解できなくても、疑問にこだわって調べるなど、積極的に関心を向けて活動することができればよいと考える。

二つ目の視点では、和菓子の用途などから、和菓子同様に昔から生活の中で思いが込められ大切にされていることやもの、あるいは季節の楽しみ方などの存在につながるように子どもの視野を広げて行きたい。和菓子から連鎖的に広がるものやことは金沢には多いと思われる。

三つ目の視点では、子どもたちの地域や家庭の中であった願い事や行事、季節らしさを話題に出し、そういうことが生活にとけ込んでいることよさを感じられるように図りたい。

#### 学びを深めるために

##### ① 一人一人の和菓子からの「文化」へのはたらきかけを促す

本単元では、次のような体験的活動を行う。一つは「氷室万頭」の時期に和菓子屋の方を迎えて氷室万頭の由来や作り方などを聞き、話を思い起こしながら実際にみんなとともに味わう活動である。氷室万頭を知らない子どもや何気なく食べていた子どもにとっても、そして、知っている子どもにとっても、本業の人のお話と、学年全員で夏場の健康や体力を願って食べることは、新鮮な思いや味わいになると考えた。このことにより、和菓子や、思いが込められ受け継がれてきたものごとへの関心が高まり「文化」へのはたらきかけを促すことができると考えた。

次は、家庭や地域の中で、和菓子など自分が知りたいものごとについて、五感を働かせて調べる活動である。家族、店の人、公共の施設の人など、文化の当事者ならではの話を聞いたり、本物を見たり味わったりすることで、文化への親しみやよさを感じ、それらを生活で大切にしようとする態度を培えると考えた。

##### ② 一人一人の「文化のもつよさ」にかかわる素朴な考えの表明を促す

氷室万頭を味わったり和菓子を調べたりする活動を通して、子どもたちは様々な思いを持つであろう。それらを大切にしておくことによって、一人一人にとって関心を持って取り組む課題が見つけたせると考えた。例えば「ずっと昔から、その日になると大勢の人が買いに来て満員になる万頭なんてすごい」「この夏菓子のように見ただけで涼しく感じるものが他にないか」などである。活動後の振り返りやワークシートで自分の思いや考えを確認していくことと、それを互いに交流する場を適宜設定することで学びの方針が持たれるようにする。

##### ③ 子どもが獲得した考えの共有化を図る

課題に取り組む途中で、自分が何をしているかを交流する場を簡単ながらも適宜設定する。このことで、情報を得る方法や体験できる場所などが皆に広められ、互いに参考になることが得られる機会や、同様の者同士がグループを作って活動を発展できる機会にする。

最終的には、自身の成果を相手にわかりやすいように工夫して絵図にまとめる活動を行う。3年生段階において、このことの繰り返しが、今後、まとめや発表として自他ともにわかりやすい表現をするための基本的な能力を培うことになると考え。研究物として一覧できる状態にしておくとともに、互いに内容について質疑応答する場を設定して成果の共有化を図りたい。

##### ④ 子ども自身の変容の自覚を促す

学びのあとに、味わったり調べたりしたものやことによさを感じられるか、何が印象に残るか、家で取り入れたり大切にしたいことはないかななどを問う。このことは、子どもが自分の共感したことや感動したことを確かめることとなり、「文化」のよさを感じられたことの自覚へとつながっていきたい。美や愛情などを大切にしたい思いや願いへの共感。それらをずっと長い間みんなが生活の中で大切にしてきたことへの感動。調べた文化を大切にしたいという願い。〇〇も調べてみたいという意欲。これらのようなことが子どもの内面にあれば、本単元においての気づきはできたにとらえたい。

(4) 本單元における授業の実際と考察

7月1日は、「氷室の日」。

これまでの流れ

金沢では、毎年この日に家族の無病息災を祈って、氷室万頭を食べている。街の中の和菓子店では、「無病息災祈願 氷室万頭」と書いてあるのぼりや看板を見ることができる。また、新

7/1	氷室の日 教師が和菓子店にお願いと打ち合わせに行く
7/3,4	各クラスごとに「わがしのひみつ見つけたよ」オリエンテーション
7/6	ゲストティーチャーをむかえて、学年全員で氷室万頭の話をつかがい、全員で会食
夏休み	自分で課題を見つけ、和菓子について調べる



聞やテレビでも氷室万頭の映像やその由来などについて見聞きすることが多い。そこで、今年度の総合「わがしのひみつ見つけたよ」の導入として、この時期、金沢の人々に馴染み深い氷室万頭を取り上げることで子どもたちにとって身近な和菓子から文化への働きかけができるのではないかと考えた。

この日、当校から歩いて10分足らずのところにある和菓子店に伺い、ゲストティーチャーとして氷室万頭の由来や願いを直接子どもたちに話していただきたいことと学年全員分の氷室万頭を当日用意していただきたいことを伝えた。昨年度も当校に来ていただいていることもあり快諾を得た。その後、当日の流れや内容など簡単な打ち合わせをし、店をあとにした。店内では氷室万頭を求めて来るお客さんが次々と訪れていた。この様子からも、7月1日に氷室万頭を食べる風習を金沢の人々がいかに大切にしているかが分かる。

7月3、4日に各クラスごとにオリエンテーションとして、氷室万頭について話し合った。下の表は、氷室万頭について調査したものである。

氷室万頭を	知っている	知らない
食べた	A:20/104人	B:36/104人
食べなかった	C:8/104人	D:40/104人

\*名前を知っている子 74人

この表の「知っている」とは、氷室万頭に願いがこめられていることを知っている子どもである  
名前だけ聞いたことがある子は「知らない」の人数に含まれている

3年生全体の子どもたちの実態としては、約半分に当たる56人が7月1日に氷室万頭を食べたことが分かる。しかし、その内の7割近くがその背景にある由来や願いについて知らずに、食べているのが現状である。全体で見ても7割以上が氷室万頭の由来や願いを知らないのである。しかし、名前を知っている子や聞いたことがある子は74人と7割を超え、知名度は高いことが分かった。授業の発言においても、7月1日は何の日かという問いに対し大半の子は、氷室の日と答えていて、知らなかった子の中にも聞いたことがある子もいた。また、次のような意見も出ていた。

- ・近所の和菓子屋さん、看板やはり紙があったよ
- ・湯涌というところに冬に降った雪をためておいて、それを出すのと関係がある
- ・前田の殿様が江戸に氷を届けたから、氷の文字がついている
- ・3色あって、それぞれの色に意味があるのではないか (N児)
- ・家族の健康を願って、7月1日に食べる
- ・ちくわも一緒に食べたよ

これからは、AのグループであるN児、BのグループであるI児、CのグループであるM児、DのグループであるY児の記述や様子を中心に、他の子どもたちの様子や実態を加えながら考察を進めていくことにする。次のプリントは、上記の4人が本単元の1時間目に書いたものである。

氷室まんじゅうって？



知ってるよ 知らないよ  
N児にたずねた時、N児は「あんこはピンク、みどり、白がある」と答えた。

食べたよ 食べなかったよ  
N児は「ピンクがおいしいよ」と答えた。また、「氷室まんじゅうは、ほうろくのまんじゅうよりも大きめで、あんこがとろとろでおいしい」とも答えた。

ふしぎなこと、知りたいこと  
N児は「どうして氷室まんじゅうというのか」と尋ねた。

N児のワークシート1  
(知っている・食べた)

氷室まんじゅうって？



知ってるよ 知らないよ  
I児は「中に入っているあんこが？」と尋ねた。

食べたよ 食べなかったよ  
I児は「あんこは、E-450が入っている」と答えた。

ふしぎなこと、知りたいこと  
I児は「あんこがとろとろでおいしいのか」と尋ねた。

I児のワークシート1  
(知らない・食べた)

N児は、近くに住んでいる祖母が毎年7月1日に氷室万頭を届けてくれている。そして、毎年届く氷室万頭を口にしてきている。今年も食べており、色や大きさ、歯触り、味など明確に覚えていた。とくに、色についてはピンク、緑、白の3色を毎年見ているだけに、興味を持っているようである。また、今年は前日の6月30日に祖母の家に行き、氷室万頭にこめられている願いについて聞き、より関心が高まったようである。「どうして7/1に食べるのかな」

「どうして氷室万頭っていうのかな」という歴史的な背景や名前の由来についての疑問からも、その関心の高さがうかがえる。

I児は、家では和菓子を食べることは少ない。祖母の家へ行ったときに時々食べている程度である。自分自身も甘いものが苦手ですほとんど食べていない。氷室万頭について知っていなかったが、たまたま家にあった氷室万頭を食べている。しかし、

久しぶりの甘いものを食べたと言うこともあり、吐いてしまっている。その時に、万頭の皮の色が少し気にかかった。味の違いがあるかもしれないと考えていて、もう一度食べたいと思っており、関心はやや高めである。

氷室まんじゅうって？



知らないよ  
M児は「氷室まんじゅうは、あんこが何色か？」と尋ねた。

食べたよ 食べなかったよ  
M児は「おいてあったけど、食べなかった」と答えた。

ふしぎなこと、知りたいこと  
M児は「氷室まんじゅうは、あんこが何色か？」と尋ねた。

M児のワークシート1  
(知っている・食べなかった)

氷室まんじゅうって？



知ってるよ 知らないよ  
Y児は「あんこが何色か？」と尋ねた。

食べたよ 食べなかったよ  
Y児は「食べてみたいです」と答えた。

ふしぎなこと、知りたいこと  
Y児は「どうして氷室まんじゅうというのか？」と尋ねた。

Y児のワークシート1  
(知らない・食べなかった)

M児は、氷室万頭について名前の由来や歴史的なことは知らないが、色や込められている願いの事を知っている。これらは、お母さんから聞いたのだそうだ。これだけ知っているのならば氷室万頭に関心がありそうなものだが、実際には目の前にあったのにもかかわらず食べていない。M児とM児の母親に聞き取り調査をしたところ、二人の話が大きく食い違っていた。M児の家では毎年買ったり頂いたりして氷室万頭を食べている。M児も和菓子は好きであり、昨年まで食べていた。しかし、M児は家で氷室万頭を見たのは今年が初めてだと思っていた。食べなかった理由は、おそらく他に食べたいお菓子があったかららしいとM児の母親は言っている。これらのことから、M児は、歴史的・文化的なことにはそれほど価値や関心を感じていないと言える。

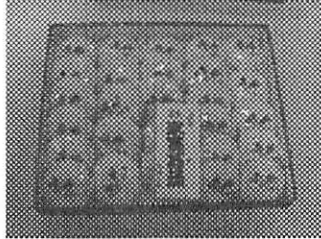
Y児は家では出されているのかもしれないが、今まで意識していなかった。それで、何も知らないし、勿論今年も食べていなかった。それで万頭と聞いたときに、今までに食べたことのある万

頭から、中にあんこが入っていることしか思い浮かばなかったようである。食べたことがないと思っているので、よけいに食べてみたいという思いが強かったと思われる。また、作り方や名前の由来などまで関心が高まったと思われる。

1 丸福のご主人を紹介され あいさつする

2 丸福さんから氷室万頭についての話を聞く  
 <話の要旨>

氷室というのは、氷をためておく部屋のこと。土を掘って藁を敷いて雪を保管した。夏でも、氷室の中は10℃ぐらいと低い。それでも、今年は60トン入れておいた雪が夏に氷室を開けると5トンになっていた。約三百年ほど昔、加賀藩の前田家のお殿さまが、冬の間氷室の中にためて置いた雪氷を、江戸の將軍家に差し上げたのが7月1日である。飛脚が8人ほど交代で、籠に載せて江戸まで運んだ。4日かかって約500kmを走った。加賀藩を出る頃にはたくさんあった氷が、江戸に着く頃には、ほんのわずかになっていた。それほど氷は貴重だった。一般の人々は、とても氷を食べることができないので、かわりに万頭を食べた。



ゲストティーチャーを迎えての児童の様子と考察は、次の通りである。

授業後、別の和菓子屋さんから、氷室万頭の由来について、他の説もあるのだという話を伺ったので、子どもたちには、後ほど話をした。

<他の説の要旨>

昔、戸室山の近くの二つの村が、加賀藩の城主に7月にご挨拶として雪を届けた。これが氷室の氷の始まり。前田利常は、江戸へ届けようとしたが、最後にはとても小さくなってしまったので、江戸屋敷の一角に氷室を設け、そこで作った氷を將軍家に届けた。明治になりある和菓子屋が胡麻入りの「室万頭」を売っていた。大正になり、その和菓子屋がつぶれ、他の和菓子屋が室万頭を作り夏に万頭を売ろうとした。赤、白、黄、緑、水色の色を付けた。最終的に赤、白、緑が残っている。

子どもたちは、話を興味深く、熱心に聞いていた。ただ、質問の内容を聞いていると子どもたちの興味・関心は主に氷を江戸まで運んだこと、氷室万頭の作り方や色のことに集まっていた。

ゲストティーチャーの話は、氷室の説明や歴史的な話が多く、万頭に込められている願いについての話がなかなか出てこなかった。子どもたちには万頭に込められた思いを感じながら食べてもらいたかったので、教師の方から質問をし、お話ししてもらった。

この授業を行った7月6日は氷室の日ではなかったが、特別に作っていただいた。

食べている子どもたちからは盛んに「おいしい！」という声が聞かれた。「元気に頑張れそうな気

3 以前から質問したいと思っていたことや 実際に話を聞いて 疑問に思ったり不思議に思ったことを質問する  
 <子どもたちから出た質問>

- ・氷室万頭の赤、緑、白の3つの色の意味
- ・赤、緑、白意外の色の有無
- ・皮の材料と作り方
- ・江戸で氷を作らなかったのか



<教師の質問>

- ・氷室万頭に込められている願いは？

4 健康を願いながら氷室万頭をいただく









